

令和6年度 病虫害防除技術情報 第6号

令和7年3月3日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

イチゴにおけるアザミウマ類の防除について

令和7年2月中旬に実施した巡回調査では、イチゴの花におけるアザミウマ類の発生が確認されました（図1）。

九州北部地方の1ヶ月予報（2月20日福岡管区気象台発表）では、平均気温は平年並50%、高い確率20%、降水量は少ない確率が40%、平年並30%と、高温少雨傾向で推移するため、今後のアザミウマ類の増加が予想されます。

気温が上昇するにつれてハウス外からの飛び込みも増加することから、被害の拡大が懸念されます。そこで、早期発見に努めて速やかに防除を実施するとともに、アザミウマ類の増殖源となる収穫残渣や圃場内・周辺の雑草を適切に処分してください。

1. 発生の状況

2月中旬に実施した巡回調査結果

発生圃場率：20.0%（前年：30.0%、平年17.2%）

平均寄生花率：0.8%（前年：2.0%、平年1.3%）

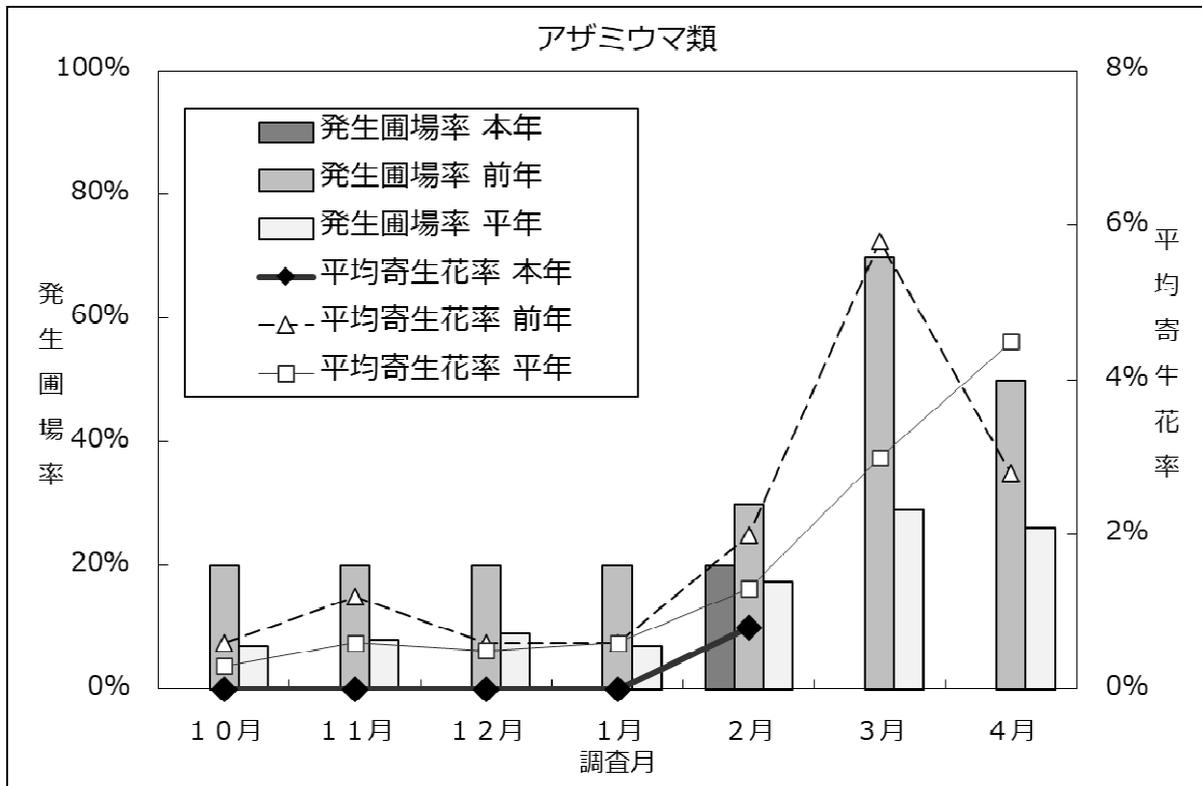


図1 発生予察巡回調査（イチゴ）におけるアザミウマ類の発生状況

2. 防除上の注意事項

- (1) アザミウマ類は、高温乾燥条件において発生が助長される。
- (2) 収穫残渣は、アザミウマ類の越冬源となるため、野積みせずに埋設するなど、適切に処分する。
- (3) 雑草はアザミウマ類の増殖源であるため、圃場内および周辺の除草を徹底する。ただし、春先にハウスサイドや天窓を開ける直前に除草を行うと、ハウス開口部からの飛び込みにより被害が拡大する恐れがあるため、除草後少なくとも2週間以上経過した後に開けるか、ハウス内のイチゴに対して防除を実施した後に除草を行うよう留意する。アザミウマ類は風で移動するため、特にハウスの風上側の除草を心がける。
- (4) すでにアザミウマ類の多発生が認められている圃場において天敵を利用する場合は、薬剤防除を複数回行い、害虫密度を低下させてから天敵を導入する。
- (5) 天敵に長期間影響を及ぼす薬剤があるため、天敵の導入にあたっては薬剤の選定に注意する。
- (6) 殺菌剤であっても天敵導入直後に薬剤散布すると影響が懸念されるため、期間を空けて散布を行う。また、防除薬剤には展着剤も含めて天敵への影響が少ないものを選択する。
- (7) 天敵に対する薬剤の影響は、日本生物防除協議会ホームページ内にある「天敵等に対する農薬の影響目安」を参照する。

ホームページアドレス

<https://biocontrol.jp/tenteki/>



- (8) 受粉用ミツバチ（マルハナバチ等）に影響を及ぼす薬剤があるため、薬剤の選定には注意する。
- (9) アザミウマ類の薬剤抵抗性発達を防ぐため、同一系統薬剤の連続使用は避ける。使用薬剤は大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫対策チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」の「いちご」「野菜類」の項目を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。特に同一成分を含む薬剤を連用しないようローテーション散布を心掛ける。

ホームページアドレス

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/>

